

芭蕉元祿事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十八年二月度 入選句 (投稿総数千七百四十七句・一般投句数五百五十五句)

選者 名和 永山

特選

そよ風にゆれる産着や四温晴 岐阜市 伊藤 瑞実

冬の終わりの季語として『三寒四温』が使われる。三日ほど寒い日が続いた後に四日ほど温かい日が続き、これを交互に繰り返して徐々に春を迎えるのである。「四温晴」とは、まさに温かな陽気なのである。「そよ風」に揺れている産着」と「四温晴」の「取合せ」の句である。切字の「や」の効果が大きい。「産着」によつて、赤ん坊の笑顔まで読者には見えてくる。これを「そよ風にゆれる産着に四温晴」としてしまつたら「産着が干されていた」という情景しか読者には伝わらない。これから温かくなるという季語と「産着」の赤ん坊が成長する姿が読み取れる。

どの顔もゆるんで見ゆる二月尽 大垣市 北浦 典子

「二月尽」とは、二月の終わりのことである。立春もとうに過ぎ、梅のつぼみも膨らみ、木の根元には草が芽を出すころ、人間も春を待ちわび、心もウキウキするのである。そんな人間模様を「どの顔もゆるんでいる」と見えた作者の人間観察力はすごい。「顔のゆるんだ」という表現で、今までの厳しい寒さに耐えてきた表情もうかがえるのである。

指先に心を集め紙を漉く 福井県福井市 三ツ山 ひろし

紙漉は、寒の水ほど上質ができるといわれる。季語は「紙漉」で冬である。三椶(みつまた)楮(こうぞ)などの皮から作られた紙の粗原料を、さらに煮たり叩いたり晒したりしたものを紙漉き槽から漉き上げるのである。冷たい水に混ぜついている紙の成分をすくい上げる作業は厳しい。毎日何枚かの紙を漉くのであるが、一つとして同じものはできない。一枚一枚に心を込め紙を漉く職人の心意気である。

秀逸

どんど焼浮かれ心も焼きにけり 大垣市 澤井 国造

久々に針もつ朝春立てり 大垣市 尾関 逸子

葉も土も付きて大根みづみづし 大垣市 平野 ヒサエ

竹林の背伸びびする声冬ぬくし 福井県敦賀市 山田 美千代

一村の一戸一戸に初明り 養老郡養老町 田中 紫香

雪晴れの窓辺に寄せる椅子一つ 岐阜市 宮西 美代子

もう一度見直す時計日脚のぶ 大垣市 多和田 一徳

漬け物の味まだ確かなる余寒かな 不破郡関ヶ原町 藤井 太郎

マフラーに友との余韻巻いて去る 不破郡垂井町 臼井 梅乃

節分会枱一升の重さかな 大垣市 谷 睦月

入選

悴みて携帯メール消せぬ誤字
 冬日満つステンドグラスの彩深し
 臘梅や白漆喰の新居住む
 ふかぶかと匂ふ敷藁牡丹の芽
 鄙びたる山ふところや鬼やらひ
 新築の槌音高く寒明けける
 梅ふふむ枝に一組の結ひみくじ
 立春の光をつかむ小さき手
 返納の破魔矢にまさる破魔矢受く
 春立つや夫より先に庭におり

京都府城陽市 谷口 好英
 愛知県稲沢市 後藤 陽子
 愛知県岡崎市 鳥居 園美
 大垣市 野村 多佳子
 大垣市 白井 秀子
 大垣市 川瀬 喜梅古
 大垣市 佐藤 すみ子
 大垣市 岡田 あや子
 養老郡養老町 田中 紫香
 大垣市 平野 きぬよ

入選

鉄棒の逆上がりして春を待つ
 味噌樽に石積み上げて冴返る
 鬼やらひ我に潜むる小鬼をり
 平凡な時が幸せ 蜷 汁
 見えさうで見えぬ高きに轉れり
 白梅のはじける音や庭の朝
 春立ちて日毎夕餉の遅くなり
 春泥に背ナ汚したる通学児
 裏木戸を叩く風音根深汁
 夕暮れに忘れ去られし冬帽子

大垣市 傍島 隆
 大垣市 傍島 豊子
 大垣市 片山 洋紅
 大垣市 小寺 春子
 大垣市 日比野 友子
 大垣市 奥田 和子
 大垣市 河合 秋信
 大垣市 浅野 亨
 大垣市 川瀬 貞枝
 大垣市 谷 彩虹

選者吟

うすらひの中のうたかた陽に生くる

永山